文音

誰か為ハくとせ詠之けさの春　湖雲
鶯ニ正月言を申多し　竹奇
鶯にひ哉く年せ出る情かな　長奇
近づきて鶯聞や朝のうち　南阜
元日も立や嵐の筆を筆に　太節
風のなか雨寒さとおか人梅の花　松乙
手にさはる春の加減や人心花　曽人
探て起て旅人へまゝしる子日哉　有斐
豆腐切る手に加ふるや春の色　漫々
かさつけに筆や椿哉家の縁　國村
はろに加き句入してする春の始筈　燕市

七種

初元のおもくは高し若菜籠　柏年
七種に聯の音でかくりけり　無涯
またる人の年若菜見せて撰めり　方久
七種や梅のちるれしおもしろし　浣砂
七草や芹は秋をあそぶ事　万休
また見れハまつる花の咲る籠若菜　草龍
思ひ知れちかつきぬけ多若菜哉　若人

丙子春

一朝ニ我引多てる若候の筆　月臺
ちる年の事ちらはらる多る君候哉　乙里
子の日多類ひ筆せよ小松引　閑外
あけぬ戸をゆすりて多る松の花　其鳳
気地しちり経の形や手男　千沚
若菜売も見れ若候の出かけ哉　月平
鶯や初音に梅の取まつし　子龍
老松のさかるも朝そ初子日　青以
いせうつ紙なきる人初子の日　（在江戸）田年
来る也音かくり童子人を見る　杜丈
柳原末田中何しきおもしろし　雲帯
春の夜の静さは文様にれず　春唄
線さるるの元様いろ哉　阿彦
華の稀人まれ動く十古暦　杜亭
はつちりとまもて加ゝ梅のまかせかり　如蘭
鶯の鳴類もせん枝の哀　草司